

第62次南極地域観測隊越冬隊の現況（令和3年6月～8月）

1. 気象・海氷状況

- 6月：低気圧の接近と大陸の高気圧の張り出しによって周期的に天気に変化した。中旬は高気圧の影響で晴れて気温の下がった日が多く、旬平均気温がかなり低くなった。海氷上の積雪状況については、基地からの目視では顕著な変化はみられなかった。
- 7月：高気圧に覆われることが多く、風が弱く晴れの日が多かった。とっつき岬手前のルート上にある冰山帯のクラックが3.6mと大きく開いていたことから迂回ルートを設定した。迂回ルートにも幅1.8m～2mのクラックが3本あり、いずれも両端から30cm付近の氷厚は1m以上あり、走行は可能であった。
- 8月：前半は、高気圧に覆われることが多く、風が弱く晴れの日が多かった。8日の最低気温が -38.4°C となり、62次隊越冬開始後の最低気温を記録した。向岩までの氷状は安定しており、上陸地点のタイドクラックも8月末時点で通行に支障はなく、大型雪上車も通行させている。

2. 基地活動

- 6月：極夜期に入り、オーロラ光学観測のため灯火制限の時間も長くなって屋外での活動時間が短くなり、日中は除雪に追われる日々が続いた。ミッドウィンター祭を18～22日にかけて実施し、越冬後半に向けた良いイベントとなった。
- 7月：13日に極夜が明け、レスキュー訓練の実施、野外活動の再開など、隊内の雰囲気も活気づいた。ここまでブリザードの頻度が多く、除雪作業に日数を割いていたが、7月はブリザードとなっても雪が少なかったため、各担当の業務がはかどった。
- 8月：とっつき岬ルート上陸地点のクラックが大きく開いて使用が難しくなったため、昭和基地対岸に位置する向岩からS16へのルート（以下向岩ルート）調査が行われた。橇を曳いての試走の結果、ルートの使用に問題ないことが確認できたため、今後の内陸旅行では向岩ルートをメインに使用していくこととなった。

3. 観測

- 6月：気水部門の悪天時のゾンデ観測を7回実施したほか、宙空部門のゾンデ集中観測が27日から開始され、7月末まで断続的に4時間毎のGPSゾンデ観測を行った。
- 7月：24～27日にS16周辺での観測オペレーションが行われ、S17のロボット気象計点検（気象）、GPSゾンデによる高層気象観測、S17のAWS（自動気象観測装置）のデータロガーボックスとバッテリーボックスの回収（いずれも気水圏一般）、S19のGNSS観測装置の入れ替え作業（地圏モニタリング）を実施した。
- 8月：気象部門では太陽高度が上がったことからオゾン全量観測を再開したほか、移動式気象観測装置を向岩（25日）とメホルメン（27日）に設置しデータ収集を開始した。地圏モニタリング部門で

は、13日にオングルガルテンにGNSS観測器を設置し観測を開始したほか、19日にラングホブデ雪鳥沢のGNSS観測装置の保守点検を実施するなど、野外での作業も本格化した。

4. 設営

6月：11日昼に汚水処理装置の不具合（排水電磁弁エラー）が発生、対処中に排水パイプが凍結するトラブルがあったものの、制御盤開閉リレー交換、処理水槽フロート交換等の集中対応を行い、翌12日に復旧した。

7月：今後の野外行動に向けた準備が本格化し、ドーム旅行用のレーション（食糧）作りを進めているほか、見晴らし岩に保管されていた橇を引き出し、昭和基地前の海氷上に移動させた。

8月：S16でのオペレーションが2回実施され、S16及びとつつき岬にデポ（仮置き）している車両及び橇の掘り起しと引出し、SM100車両整備のための昭和基地持ち帰り、とつつき岬に橇積みしてデポしていたドーム掘削用液封液ドラム缶橇のS16への移送が行われた。

5. その他

6月1日に、電波の日と気象記念日を祝う式典が催され、隊員全員に趣向をこらした礼状と記念品が、気象部門と通信部門からそれぞれ手渡された。

7月6日には、気象棟跡地に雪洞を作成し、七夕を兼ねて極夜の終わりを祝うイベントを開催した。

8月22日には、越冬隊の家族向けに行われた帰国日程等説明会において、昭和基地とご家族とを中継で結んだ。当日参加されたご家族にむけて隊員全員が近況を報告し、ご家族からの質問やコメントに、笑いあふれる、なごやかな会となった。

情報発信としては、6月～7月にかけて4件の南極教室を実施したほか、7月～8月にかけて3件（北極・南極科学館連携機関、毎日新聞社、極地研一般公開）の南極中継を実施した。また、定期的に観測隊ブログ、極地研公式SNSへの投稿を行い、観測隊の様々な活動を発信している。